

# 星の彼方で詩人たちは歌う

ーアルテンベルク作品におけるシュトルム作品の引用ー

田 中 ま り

Fin de siècle のウィーンで活躍した印象主義作家ペーター・アルテンベルク Peter Altenberg (1859-1919) の散文スケッチ・散文詩には、他の作家の作品の一部をまるで「本歌取り」のように巧みに引用しているものがある。もちろん作品の主人公が朗読するというありふれた形の引用もあるが、多くは描写の一部としてその場面の雰囲気に見事に溶け込んでいる。そのような例のなかで少し珍しいケースとして注目されるのは、生粋のウィーン人のアルテンベルクにはその詩の内容をとらえることすら難しいのではないかと思われる低地ドイツ語の詩が、アルテンベルク流の表記法とアルテンベルク自身によるとと思われる翻訳的な説明付きで引用されている作品である。

1897年の初めに出版されたアルテンベルクの第二作品集『アシャンテ』Ashantee にその作品は収められている。この作品集はそもそも、ウィーンの動物園の民族ショーに出演していたアシャンテ族の人々との交流から生まれた一連のスケッチ「アシャンテ」を中心に編まれているが、その他にアシャンテ族とは関係のない幾つかのスケッチ群も収録されている。その一つの「女性は我々の心の状態である」Une femme est un état de notre âme というスケッチ群の「平穏」Friede という作品のなかで、平穏な一日を締めくくる夕べの雰囲気にぴったり沿った内容の低地ドイツ語の詩が引用されているのである。次にその部分の訳を挙げるが、カタカナで表記した部分は、典型的な低地ドイツ語の表現が残され、カッコ内にその単語の標準ドイツ語訳が書き込まれている箇所であり、その他の部分も低地ドイツ語の雰囲気を伝えつつ低地ドイツ語を知らない読者にも容易に意味が解るように表記が工夫されている。なお原詩の7、8行目は省略されており、文末に加えられたゲダッケンシュトリヒなども含めてこれらの改変はアルテンベルクの解釈によるものと見られる。

夕方。

ランプに灯をともして！

「夕べが近付くと――

回りの世界も心も静まる――

疲れた手が膝の上におかれ、

壁ノトケイ（縦長の置時計）からは、

昼の間は聞こえてこなかった、

振り子の音が聞こえる――

今いちどタイヨウ（太陽）が

田 中 ま り

黄金の光で窓辺をテラシ（照らし）、  
 ネムリ（眠り）と夜がやってくる前に、  
 皆はにこやかに一日を称える――  
 ヒトノココロ（人の心）は和らげられる――  
 タベが近付くと――。」

こう、詩人たちは歌っている。私たちからはるか彼方に離れた――星ほどにも離れた詩人たちは。  
 (WS. <sup>(1)</sup> S. 278)

この低地ドイツ語の詩の作者は北ドイツの短編作家であり抒情詩人としても有名であったテオドル・シュトルム Theodor Storm (1817-1888) である。そしてここに引用されている作品は1872年の7月に成立したとみられる「クラウド・グロートに」An Klaus Groth である。この作品はシュトルムの叙情詩の中でも数少ない低地ドイツ語で書かれた詩のひとつであり、同じ北ドイツ出身の詩人でシュトルムと深い親交があり、その作品を主に低地ドイツ語で発表していたことでも知られているクラウド・グロート (1819-1899) に捧げられている。

この「クラウド・グロートに」は、シュトルムの研究家にとっては伝記的にも文学的にも重要視されている作品ではあるが、一般的にみればシュトルムの作品全体の中で決して目立つものではない。はたしてアルテンベルクはどのような経緯でこの詩を知るに至ったのであろうか。

これまでアルテンベルクに関しては、一般にフランス文学の影響が強調される傾向にあった。印象主義という文学スタイルそのものがフランスに由来するのはもちろん、処女作品集『見るがままに』Wie ich es sehe の巻頭にフランス印象主義の代表的作家ユイスマンスの作品が2ページにわたって引用され、それがアルテンベルクの創作姿勢の宣言となっていることをみても、彼がフランス文学に深く傾倒していたらしいことは容易に推測される。伝記的な記録にもそれを裏付ける数々の証言がみられる。したがってアルテンベルクの文学的嗜好といった点から見ても、このシュトルムの低地ドイツ語の作品は幾分異質な存在であるように思われる。

そもそも世紀転換期の大都市ウィーンで、定職もなく定住もせずにボヘミア的な生活を送っていた作家アルテンベルクと、十九世紀後半に北ドイツの片田舎で判事という堅実な市民的職業に就き、家庭生活を重んじ多くの友人たちとも親しく交わる慎ましい日常を送っていた作家シュトルムという取り合わせには、かなり意外という感が強い。それどころかこの二人の間に何らかのつながりがあるということ自体想像しがたいであろう。事実これまでシュトルムの側からもアルテンベルクの側からも、二人の関連が論じられたことはないようである。しかし実際上記の例から解るように、アルテンベルクは意外にもシュトルムのような、当時の新しい文学潮流からは一見離れているかにみえる作品からも文学的な養分を得ていたのではないかと思われる。

そこで本稿では、まず引用されたシュトルムの詩が成立した際の経緯や当時のオーストリアにおけるシュトルムの受容状況を背景に、アルテンベルクがシュトルムの作品を知るに至る可能性のある幾つかのルートの推測を試みたい。さらにシュトルムの原詩とアルテンベルクの作品における引

用箇所を比較しながら、この引用の効果やアルテンベルクにおけるシュトルム文学の影響について考えてみたい。

## I

遅くとも十九世紀後半にはシュトルムの文学的名声が確立していたことを考えれば、1859年生れで、しかも早くから文学に深い興味を寄せていたアルテンベルクが、その作品に偶然触れたとしても不思議ではない。当時すでにシュトルムの作品は、親交のあった作家や研究者によって、プロイセンばかりでなくオーストリアにおいても広く紹介されていたからである。ここではそのなかでもシュトルムと親しい交流のあったエーミール・クーとアレクサンダー・シンドラーに注目したい。

1828年生まれのエーミール・クーEmil Kuh はオーストリアの文学研究家であり、作家でもあった。1864年からはウィーンの商科大学でドイツ語およびドイツ文学を担当していたらしい。ヘッベルの研究家として知られていたが、他の北ドイツの作家たちとも親しく書簡を取り交わしており、シュトルムとの間にも多くの書簡が残されている。シュトルムとクーの交流は残されている書簡から見ておそらく1870年前後に始まったもののように思われる。これらの書簡の中でクーはシュトルムの文学について自ら研究し感じたところを詳しく述べており、一方シュトルムもそれに誠実な答えを返している。このような活発な議論を経て、クーはシュトルム文学の最良の紹介者の一人となったと考えることができるのである。事実1874年の11月11日から16日の6日間にわたって、クーはシュトルムをウィーンの新聞「ヴィーナー・アーベントポスト紙」にエッセイの形で紹介しているようである。すでにその前年からクーはそのエッセイに備える必要もあつたのことと思われるが、伝記的事実などを確認していたものらしく、その質問に答えたと見られるシュトルムの書簡が残されている。さらにクーは実際の掲載に先立つ10月24日にシュトルムにエッセイの梗概を伝えているということで、それによればエッセイは「抒情詩」「情景、人物そして設定」「重要な物語」「小説とメールヒェン」「伝記的事実」の五部構成から成っていたらしい。シュトルムはこのエッセイを大変気に入ったらしく、新聞が出た10日後の11月27日には、さっそく感謝の言葉とエッセイの感想をクーに送っている。その書簡でシュトルムは、特に二章、三章、四章が気に入ったということ、自分の散文作品を三つのグループに分けるとするのは優れたアイデアであると絶賛している。シュトルムにとっても自分の作品を客観的にとらえる一つのよい機会となったのであろう。しかもこの新聞のエッセイは当然多くのウィーン人の目に止まったと考えられることから、いかに遅くともこの時点において、シュトルムの名前は確実にオーストリアの市民層に広く知られるようになったと考えられる。

シュトルムと同年輩のユーリウス・アレクサンダー・シンドラーJulius Alexander Schindler は、特に1870年以降はフリーの作家としてユーリウス・フォン・デア・トラウン Julius von der Traun のペンネームで活躍していたが、オーストリアの帝国議会の議員でもある、いわゆる貴族であった。彼はザルツブルク近郊の自らの所領レーオボルツクローンとウィーンの間を往復しながら生活し

## 田 中 ま り

ており、シュトルムはシンドラーから、このレーオポルトクロンに度々招待されていたといわれている。シュトルムはしばらく躊躇したものの1872年には招待に応じて2週間ほど滞在している。北ドイツの平坦な地形に慣れたシュトルムにとってアルプスの高峰に続く山々の間に点々と湖が広がる変化に富んだ眺望は強い印象を残したらしい。後には小説『告白』Ein Bekenntnis の枠物語の舞台としてこのレーオポルトクロン周辺の町を描いているほどである。なおこの訪問がシュトルムにとって唯一のオーストリア体験ということにもなる。シュトルムはアルテンベルクがその生涯の大半を過ごしたオーストリアの首都ウィーンにはついに足を踏み入れることはなかったからである。

おそらくこのような人々の紹介によって、シュトルムの名前がオーストリアにおいてかなり一般に知られていたことは間違いないであろう。シュトルムの主要な作品に関していえば、様々なアンソロジーに採用されていることから考えて、アルテンベルクが無名時代に乱読した本のなかに偶然含まれていた可能性も高い。しかし、ここで一つの疑問が生じるのである。先に述べたようにアルテンベルクが引用している詩は、シュトルム研究家の間では重視されているものの一般にはそれ程有名であるとはいいがたい。というのもこの詩は低地ドイツ語で書かれたということもあって、アンソロジーなどで採用される可能性は極めて低いといわざるを得ないからである。そこで考えられるのが、この詩をささげられたクラウス・グロートの詩に多くの美しい歌曲を書いた作曲家ブラームスからのルート、すなわちアルテンベルクが文学と並んで大変愛好していた音楽からのルートである。

## II

もともと「クラウス・グロートに」は、1872年9月5日付のグロート宛てのシュトルムの書簡にそえられたものであった。ここにアルテンベルクが省略した部分も含めて、シュトルムの原詩と訳を挙げよう。

Wenn' t Abend ward,	夕べが近付くと、
Un still de Welt un still dat Hart;	回りの世界も心も静まる。
Wenn möd up' t Knee di liggt de Hand,	疲れた手が膝の上におかれ、
Un ut din Husklock an de Wand	壁の時計からは、
Du hörst den Parpendikelslag,	昼の間は聞こえてこなかった、
De nich to Woort keem över Dag;	振り子の音が聞こえる。
Wenn' t schummern in de Ecken liggt,	部屋の角に夕闇が漂い、
Un buten all de Nachtwulk flüggt;	外ではよたかが飛び交う。
Wenn denn noch eenmal kiekt de Sün	今一度黄金の夕日が
Mit golden Schiin to' t Finster' rin,	窓辺を照らし、
Un, ehr de Slâp kümmt un de Nacht,	眠りと夜がやってくる前に、
Noch eenmal Allens lävt un lacht, -	皆はにこやかに一日を称える。

Dat is so wat vör't Minschenhart,      人の心は和らげられる。  
Wenn't Abend ward.      タベが近付くと<sup>(2)</sup>。

詩には「フーズムにて 1872年7月」という日付が付されており、詩の成立そのものは書簡よりさらに二ヶ月ほどさかのぼることがわかる。シュトルムはその間にこの詩を二人の息子への書簡にも添え、感想を求めたらしい。また、この年は先に述べたレーオポルトクロン訪問の年であり、詩が成立した7月と送られた9月に挟まれた時期はもっぱら旅行に費やされていたものと思われる。おそらくこの書簡はその旅行の直後、フーズムに戻ってまもなくのものであろう。実際そこでシュトルムは、かつてシュトルム自身も絶賛し紹介したグロートの代表作『クヴィックボルン』Quickborn の出版20周年記念会がその少し前に催されたことに触れ、その後は自分の秘書の不正事件があって気分が落ち込んでいたことなどを述べ、さらにハイリゲンシュタット、ミュンヘンなどを経由してのレーオポルトクロンへの訪問についても筆を進めている。

シュトルムのこの作品に対してグロートは、その数年後の1877年のシュトルム60才の誕生日に「テオドル・シュトルムに」An Theodor Storm という詩で応えている。これは翌9月15日付の「プラットドイツ・フースフュリント紙」に掲載され反響を呼んだ。この詩も当然のことながら低地ドイツ語で書かれているが、シュトルムの詩が一日の終わりの静かなタベの情景を歌っているのに応じるごとく、グロートは今眠りから覚めようとしている清々しい朝の情景を歌いかけているのが興味深い。シュトルムの詩への応答であることを強調する意図もあつてか、シュトルムのHusklock an de Wand といった表現に合わせて Wandklock といった共通する表現も用いている。

シュトルムとグロートのこのような親しい交流は、すでに1853年ごろシュトルムが政治的な理由で故郷フーズムを離れてプロイセンに職を求めた頃に始まっている。当時グロートは最初の低地ドイツ語の作品集『クヴィックボルン』を出版したばかりであつた。他方シュトルムはグロートの低地ドイツ語の詩に大変感激して、ベルリンの文芸仲間や友人のメーリケにその内容を紹介したばかりでなく、グロート本人にも個人的に手紙を出したのである。その書簡によればグロートの低地ドイツ語の詩は、文学的な言葉の美しい響きに慣れて方言のもつ素朴さや暖かさから遠ざかっていたシュトルムにとって新鮮な驚きを与えたということであり、シュトルムはグロートの詩に触発されて、このときすでに低地ドイツ語の詩作を試みているほどである。

しかしシュトルムをこれほどまでに魅了した低地ドイツ語の響きは、同時にその内容を理解しようとする他の地方の読者にとっては大きな障壁ともなっていた。したがって主に低地ドイツ語で作品を発表していたグロートの一般への知名度は必ずしも高いとはいえなかったようである。一説には『クヴィックボルン』の出版20周年記念会も、そのようなグロートへの経済的援助の意味合いもあつたとされている。そのようなわけでグロートの詩に引きつけられる人々は、むしろ低地ドイツ語を容易に理解できる同郷人の中からこそ現れたのである。

その理解者の一人がホルシュタインのハイデ出身の父親をもった音楽家ヨハネス・ブラームス Johannes Brahms である。十九世紀後半のウィーンの音楽界の寵児であつたブラームスは、当時の

## 田 中 ま り

新しい音楽の流れに抵抗を感じる市民階級に安心感を与えるような、伝統の重みを生かした重厚な曲作りにおいては定評があった。それと同時に彼の低地ドイツのメランコリックなメンタリティと北方的なロマンティシズムという個性によって、その音楽は他にはない独特な陰影に彩られていたのである。

ブラームスはその晩年にテキストを重視した多くの歌曲を作曲しているが、その際に自分の故郷のシュレースヴィヒ・ホルシュタインの詩人たちの作品を多く取り上げている。なかでもグロートの作品は十曲以上に及んでおり、その傾倒ぶりがうかがわれる。そのほとんどは高地ドイツ語の作品であるが、当時の市民階級の間で好まれた重唱用の曲としては低地ドイツ語の詩にも作曲しているらしい。またブラームスとグロートは頻繁に書簡を交わしていたばかりでなく、グロートがウィーンにブラームスを訪れてもいるのである。故郷を遠く離れた異国の地にあつて、ブラームスが同郷の詩人を暖かく迎えたであろうことは想像に難くない。このようにオーストリアにおけるグロートの知名度はブラームスとの関連でかなり高まったのではないかと推測される。

しかもブラームスはシュトルムの詩も作曲しているのである。作品番号86の4「荒野を越えて」über die Heideである。作曲年は不詳であるが、おそらく1877年から78年の間であるといわれている。「荒野を越えて」が成立したのはクーのエッセイより後の1875年であるから、ブラームスがこの詩をいち早く知っていたとすれば、すでにシュトルムの名前がそれなりにウィーンで知られていたということも考えられるが、先のグロートからの紹介によるものという推測も成り立つであろう。ところでこのことをシュトルムは知っていたのであろうか。シュトルムが大変な音楽愛好家であり、自らピアノを演奏したばかりでなく、素人による合唱団を指導・指揮していた関係もあつて歌曲に大きな関心を寄せていたことは周知の事実であり、ブラームスの作品についても、ピアノ曲、合唱曲双方に親しんでいたという。そのようなシュトルムであれば、自分の作品にブラームスが曲を付けたことを知れば非常に喜んだと思われるが、残念ながらそのような証言が全くないことから考えて、おそらくは知らなかったのではないと思われる。

以上のように十九世紀末には、すでにブラームスによって様々な北ドイツの詩人の作品がウィーンの聴衆に広く紹介されていたのである。それらの詩は彼の楽曲の調子とあいまって、南のウィーン人たちにとっては、一種のエキゾチックな、目新しい雰囲気を持っていたと思われる。

アルテンベルクもまたシュトルムやグロートの名前をブラームスの曲から知った可能性は高い。というのもアルテンベルクは文学ばかりでなく、音楽にも大きな関心を寄せていたからである。幼年期のヴァイオリン・レッスンの試みは挫折に終わったとはいえ、様々な歌曲を歌うことを好んだことは妹の伝記的証言にも現れている。その音楽的嗜好は意外に保守的であり、その点では当時のウィーンのブルジョア市民階級の好みとかけ離れたものではなかったらしい。皮肉にもアルテンベルクの散文作品に関心を示したシェーンベルクや、作曲までしているアルバン・ベルクなどの十二音音楽の作曲家の曲よりも、耳に心地よく記憶しやすいメロディーを持つオペラのアリアに魅力を感じ、大掛かりでドラマチックなワーグナー、さらにはメランコリックなブラームスも大いに好んでいたようである。そのブラームスの歌曲から作詞者たちに興味を覚えたとすれば、それを糸口に

様々な作品集の小道をたどるうちに、ブラームスの曲に登場する一人の詩人シュトルムがブラームスの曲に登場するもう一人の詩人グロートにあてたこの作品を発見することはあながち不可能とはいえないであろう。

### Ⅲ

では実際にアルテンベルクはシュトルムの作品をどのように引用しているのでしょうか。「平穩」はクリスティーネという女性の一日を、あたかも一人の観察者、つまりアルテンベルク自身が彼女の生活を一日中観察するような淡々とした調子で描き出している。その描写は、朝の身支度から夜ランプを消すまで、事細かに続く。

彼女はどんな生活を送っているんだ?! 言ってみたまえ!

彼女は目を覚まして、茶色っぽい金髪を後ろになで付け、デーリング石鹸と歯磨粉の匂いのする洗面台に立って、可愛い顔を水に浸し、石鹸を泡立て、洗い流し、乾かす。

そうやって時がすぎる――。

それから朝食。少し疲れて彼女は座っている。落ち着き払って。いつもと同じ皿、いつもと同じ刺繍のついたテーブルクロス、いつもと同じお茶の香り。

快適できれいに調整された狂いのないメカニズム、朝の生活 (WS. S. 275)。

クリスティーネの一日は細々した雑事に埋め尽くされて、その人生はあたかも細切れになったように感じる。彼女の単調ともいえるような平穩な毎日を表すために、「いつもと同じ」が繰り返され、さらに「狂いのないメカニズム」という言葉が、その平板な均質性を示している。さらに午前中、彼女は部屋の中をあちこち歩き回り、あるいは大事にしている小さな金の時計を注意深く取り出してその美しさを満足げに眺めたり、すこし片付けをしたり、分類したり、何かを書き付けたり、きれいに切り整えた花束を花瓶に差す手順が細かく描かれる。それがうまくできると彼女は仕事の出来を眺めながら「これでちゃんとしたわ!」と安心するのである。部屋のドアは開いたりしまったり、落ち着かなげに秩序を外れているが、突然全てが清潔で明るい様子に変わる。花瓶に差された花もすっきりと磨かれた窓のそばで瑞々しく咲いている。

全ては生き生きと息づいて、健やかだ。

この気分はもうずっと変わらない。いつも同じように健やかで生き生きと整っている。

今は何時だろう?!

どうやってお昼までの時間が過ぎていくのだろう?!

彼女は時間を過ごす。

人々は自分の席におさまり、ナプキンを取る。

田 中 ま り

父親は自分の可愛い娘を愛情を込めて見ている。目まぐるしい人生の中で、唯一目が休まる場所とでもいうように。

それはずっと変わらない――。水をやった花や、片付けられた部屋と同じように。

もしそうでなかったらどうなるのだろう、ねえ、クリスティーネ――?!

いやいや、それはそんなものなのだ! そして昼に続く夜もきっとそうなのだ!

人々は話す。黙る。何か新しいことは?! 誰かがいて、そのそばに誰かがいたんだ。

いつもと同じ、昼食の後の食堂のにおい。

(WS. S. 276)

最初は穏やかな生活を淡々と描くスケッチと見えたものが、ここまで「いつもの」immerを繰り返されると見方が変わってくる。クリスティーネが時間の大半を費やしている家庭内の細々した仕事は決まり切ったものであり、そこには何か新しいことやわくわくするような驚きは全く訪れることなく、毎日が同じことの繰り返しである。そして彼女の生活をそのような生気のないものに行っている存在が何者であるのかということに、読者は徐々に気付いていく。それはどうやら彼女に愛情深いまなざしを注ぐ父親であるらしい。

父親はコーヒーを飲み、そして人々は彼が自分の娘をとっても愛しているのに気付く。

でも彼は何という目をしているのだろうか?! 自分の姿を眺めているのだろうか?! 彼女はシェーベルトの歌曲のようなものなのだろうか?! 彼は他の人間になって自分自身を褒めちぎるのだろうか?! 心の中では感謝の祈りが鳴り響いているのだろうか?!

決してそんなことはない。

父親は「お前が健康で穏やかで全てが平穏に続いていきさえすれば――!」というように振る舞う。

彼は決して謎を解きも、目覚めさせもしない!

父親はこの黙りこくった重苦しい生活そのものなのだ。それは気付かれることなく続く。それは続いていくのだ。(WS. S. 277)

父親は娘の生活が平穏にすぎること願うあまり、人生にまつわるあらゆるリスクを娘の生活から取り除こうとした結果、彼女の生活に活気をもたらすはずのあらゆる驚き、あらゆる気付きの機会も娘から奪ってしまうのである。それは同時に彼女の人生そのものを窒息させることにもなっている。しかしそのような生活のなかにも、ひそやかに人生へのあこがれが入り込んでくる。

人々は本を読む。詩人たちの本は星のようだ。私たちから無限に離れた所にある。しかもそこで輝いているのだ。(WS. S. 277)



クリスチーネの単調で機械的な日常は、詩人が歌う人生におけるあの特別な瞬間、カイロスとも呼ばれるような瞬間を決して持たない。それは彼女の生活からは、何万光年も離れた星ほどにも隔たっているのである。しかし同じ家族でも、男性である彼女の兄弟は違う人生を送っているように思われる。

一人の兄弟が戻ってきて、また急いで、男性たちだけが知っている、彼女の知らない生活へと戻っていく。紫煙の漂う軽薄で自由な生活へ。

そこでは人生は音を立てて回っている。人々が回すのだ。(WS. S. 277f.)

この表現からは、彼女の兄弟はある程度自分の人生の主導権を持っているらしいことが推測される。そしてアルテンベルクはもちろん、安全ではあるが生気のない生活より、多少の危険はあるものの自分で道を切り開くことのできる活気ある人生の擁護者であろう。そして冒頭に引用したように、夕方ランプに火がともされた瞬間に、クリスチーネからは星ほども離れた詩人の言葉がまたたく。それは確かに離れているものの、その光によって何かをささやきかけ、気付かせる存在でもある。しかしその光にもかかわらずクリスチーネの生活はなおもメカニカルに続き、一日の終わりはあの父親との夜の挨拶で締めくくられるのである。

アルテンベルクはこの低地ドイツ語の詩の中に、大都会の喧騒と危険に身をおく人生とは対極にある、しかしながらウィーンの市民階級の単に危険を回避するだけの単調な人生とも全く違う、確固とした静かな生活を見出だしたように思われる。それは確かに一見クリスチーネが送っている日常と同じように、暮らしの中のなんでもない穏やかな夕べの光景を描き出したもののように見える。そのために、この詩はこのスケッチにすんなりと溶け込んで、平穏な夕べの雰囲気伝えてもくれるのである。しかしそのように外見的には似通ったものでありながらもシュトルムの詩が伝えているのは、クリスチーネの生活のような作られた平穏でも機械的で心のない日常でもなく、活気のある人生にふと訪れる風の瞬間なのである。そのカイロスの放つ微かな光は、それとは遥かに隔たった無自覚な日常に、星の光のように降り注いでいる。アルテンベルクがその光を感じ取っていたからこそ、この引用がかくも巧みに印象深いものとなったように思われるのである。

## 注

- (1) WS=Wie ich es sehe
- (2) Storm, Theodor: Gedichte Novellen 1848-1867

## 参考文献

- 1) アーベントロート・田中訳：クラシック音楽の系譜 東京 1998年
- 2) Altenberg, Peter: Wie ich es sehe. Berlin <sup>4</sup>1904=WS
- 3) Hinrichs, Boy (Hrsg.): Theodor Storm-Klaus Groth Briefwechsel; Mit Dokumenten und den Briefen

田 中 ま り

von Storm und Groth zum Hebbel-Denkmal im Anhang. Berlin 1990

- 4) Laage, Karl Ernst: Theodor Storm: Sein Leben und Werk. 5 Aufl. Husum 1989
- 5) ラーゲ・田中訳: シュトルムの生涯と文学 東京 1991年
- 6) Langner, Martin-M.: Brahms und seine schleswig-holsteinischen Dichter. Heide 1990
- 7) Storm, Theodor: Gedichte Novellen 1848-1867. Frankfurt am Main 1987
- 8) Storm, Theodor: Briefe Bd. 1. Berlin 1984
- 9) Storm, Theodor: Briefe Bd. 2. Berlin 1984
- 10) 田中 宏幸: 抒情と回想の文学 金沢 1997年